

覺韻の源流に就て

著者	松村 利行
雑誌名	漢文學會々報
巻	4
ページ	159-170
発行年	1936-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146752

覺韻の源流に就て

松 村 利 行

覺韻(ak)は、六朝の中期に、古韻屋(ok)、燭(ok)、沃(ok)鐸(ok)の各入聲韻より派生した所の新韻である。而して、丁度この新韻覺が組成せられた頃に、平上去聲の有尾韻に於ては、古韻東・董・送・(ong)。鐘・腫・用・(ong)。冬・○・宋・(ung)。唐・蕩・宕・(ong)の各韻より新韻たる、江・講・絳韻(ang)が組成せられてゐる。而して、覺の(ak)と江の(ang)と互に體韻を同じうするが故に、兩者相依り以てこゝに彼の「廣韻」に見えたるが如き、江・講・絳・覺の新韻目を形づくるに至つたのである。

従つて隋唐時代にては、「廣韻」の韻目に示されたるが如く、覺韻の所屬字は凡て(ak)韻となるが、古韻に於ては夫々異なる韻を形成してゐた事になるのである。然らば覺韻の源流は如何になつてゐたかといふ事になる。

そこで先づ源流を明にする方法を考へねばならぬ。併し乍ら可能と思惟せられる方法は僅に二つ限りである。即ち第一の方法は、現存せる詩文の押韻例を根據として推定する事であり、第二の方法は

諧聲字を中心として、平上去聲の一群と入聲との對應關係を明にし、以てその源流を明確にする事である。故に以下、我が國に古韻の面影を傳へてゐる所の、覺韻に屬する諸假字音を引證し、以て夫等の諸字の源流即ち本籍韻を明にしてみようといふ。

第一、沃韻(ouk)よりなれる覺韻……覺・樂、雹・卓・濯

(A) 覺

一、大方廣佛華嚴經 卷第三、大乘經音義第一之四、(新集藏經音義隨函錄、四振)

匪覺。音教。

二、同經、

卷第六十二、

覺。覺悟 上古孝反、

右の音注の如く、覺字の音が教。なれば、教。は無尾韻去聲效。の韻目に屬する故、覺も亦效。に屬する事になり、又、古孝反とするなれば、孝。は無尾韻上聲皓。の韻に屬する故、覺も亦皓。に屬することになる。故にこれよりして、覺。はもと、豪(皓)肴(效)の古韻(ou)に屬してゐた入聲(ou)韻なりしことを明にしうる。

尙、覺が(ouk)韻として押韻せる例が左の如く存することによつて更にこれを確證づけうと思ふ。

晉 陶淵明、擬挽辭三首、

(漢魏六朝百三家集、第四十七冊、陶彭澤集。)

有生必有死、早終非命促。昨暮同爲人、今旦在鬼錄。
魂氣散何之、枯形寄空木。嬌兒索父啼、良友撫我哭。
得失不復知、是非安能覺。千秋萬後歲、誰知榮與辱。
但恨在世時、飲酒不得足、

(B) 樂

三、佛說長阿含經 卷第十七、第三分露遮經第十。(國譯一切經、阿含部七、)
所以は何ん。斯は精勤しやうごん、專念せんねん、不忘ふろう、樂獨(ごくどく)、閑居けんこによつて之を得る所なり。露遮よ。

漢 白狼王唐敢、遠夷懷德歌、(古詩歸卷四)

荒服之外、土地墮圯、食肉衣皮、不見鹽穀、
吏譯傳風、大漢安樂、携負歸仁、觸冒險狹、
高山岐岐峻、緣崖礧石、木薄發家、百宿到洛、
父子同賜、壤抱匹帛、傳告種人、長願臣僕。

右の假字例及び押韻例よりして、樂の古韻も沃韻の(○E)なりし事を知りうるであらう。

(C) 電

四、增壹阿含經卷卅三、等法品第三十九。(國譯一切經、阿含部九)

爾の時三十三天、見已つて復歡喜を懷き、「此の樹今日已に(はくせつ)電節を生ぜり、久しからずして當に復開敷すべし」と。

入聲電字に對次する韻字は無尾韻の平聲包字である。而して包字は肴韻の韻目に屬するものである。尙、肴韻に對する入聲は沃韻故、電の古韻は(ou)にしてこの沃韻に屬してゐたことになるのである。

(D) 卓

五、釋日本紀 卷十一、述義七、氣長足姬尊、(國史大系第七卷)

皇太后攝政元年。伐旱。太子令拜三角鹿笥飯大神。(トクシユ)卓淳國

入聲卓字に對次する無尾韻の他聲は、去聲效韻の棹字である。而して棹(效韻)に對應する古韻の入聲は沃韻である。故にこの卓字も沃韻を本籍韻とする所のものである。

(E) 濯

六、根本說一切有部毘奈耶 卷第三十九、

強牽苾芻僧房學處第十六。(國譯一切經律部二十、)

師の臥處に於て皆爲に敷設し、(ザユク)濯足水、(ゾク)塗足油は一邊に安住し、各自ら洗足して溫堂中に入り、所持の經を誦して隨處に眠臥せり。

詩經大雅 靈臺四章

王在靈囿。

麀鹿攸伏。

麀鹿濯濯。

白鳥鵲鵲。

王在靈沼。

於牧魚躍。

孟子、卷第三、滕文公

曾子曰、不可、江漢以濯之、秋陽以暴之、皜皜乎、不可尚已、

孟子 卷第六、告子章句上、

孟子曰、牛山之木嘗美矣、以其郊於大國也、……牛羊又從而牧之、是以若彼濯濯（秃秃）也、人見其濯濯也、以爲未嘗有材焉、此豈山之性也哉、

晉陶潛 時運四章

（古詩源 卷第八）

洋洋平津、

乃漱乃濯、

邈邈遐景、

載欣載矚、

稱心而言、

人亦易足、

揮茲一觴、

陶然自樂、

晉陸雲 晉故散騎常侍陸府君誄、

（漢魏六朝百三集、第
三十九冊、陸清河集）

時值大過、

士爽其德、

虔惟常侍、

高明柔直、

履冰察糈、

淪心遠測、

春存三季、

形志于色、

頻顛厄運、

載離咎愆、

靖享思順、

曹氏匪革、

投辨釋紱、

浩思東嶽、

遁世無悶、

清源是濯、

右の諸押韻例によつても明なる如く、濯の古韻は(ol)にして、沃韻に屬せる事を知りうるであらう。

尙、濯字に對次する無尾韻の他聲に、去聲郊韻に屬する權字があるが、これよりみても古韻は(ol)にして、且、本籍韻は沃韻であつた事を察しうる。

第二、屋韻(ol)よりれる覺韻……啄

七、倭名類聚鈔 卷第十八、羽族部第二十八、羽族體第二百三十二、喙……鳥口也、四聲字苑云、啄。
丁角反、訓都以波無、又用濁字、音闕、

詩經小雅 正月十三章

咈咈彼有屋。

藪藪方有穀。

民今之無祿。

天天是楮。

嗇矣富人、

哀此惇獨。

莊子 外篇中、山木

旣雕旣琢、

復歸于朴、

文子 卷一、道原篇

風興雲蒸、

雷聲雨降、

茲應無窮、

己雕己琢、

還復于樸、

啄字を倭名鈔の音注は、鬪としてゐる故、之によれば啄の古韻は無尾韻尤(ol)の入聲たる沃韻なり

と思はれるが、併し、丁角反の反切よりして、又は左の諸韻例に示した啄の諧聲字よりして、啄の本籍韻は沃韻にあらずして屋韻(○ヰ)なりしことを明にしうるのである。何んとなれば倭名鈔の音注よりも支那の押韻例は正確なるが故に。

第三、燭韻(○ヰ)よりなれる覺韻……角・樸・濁

(A) 角

八、聖德太子傳私記 上卷、法隆寺年中行事、
(大日本佛教全書、
聖德太子傳叢書)

八臣者、所謂綺里季。(ヤリキ)角里先生。(カクリ)袁公。(エン)袁司徒。(エンシ)夏黃公。(カ)己以四皓。鬼谷先生。張儀。蘇秦。榮啓期。孔

夫子也。

九、摩訶僧祇律 卷第七、僧殘戒を明すの餘。(國譯一切
經律部八)

或は相(タカヒ)に耳(ミミ)に聒(カ)し、是の如(タカヒ)き比(ヒ)の種々の音聲(おんじやう)を作して戲笑(げせう)するなり。

二、平家物語 上卷第一、二代后、

かの紫宸殿の皇居には、賢聖の障子立てられたり。伊尹(いゐん)、鄭五倫(ていごろん)、虞世南(よせなん)、太公望(たこうぼう)、角里先生(かくりしやう)、李勣(りせき)、司馬、手なが、足なが、馬形の障子、鬼の間、李將軍が姿をさながらうつせる障子も有。

詩經召南、行露三章

誰謂雀無角、

何以穿我屋、

誰謂女無家、

何以速我獄、

雖速我獄、室家不足。

全 周南 麟之趾三章

麟之角、振振公族、于嗟麟兮、

全 周頌 良耜一章

殺時犉牡、有秣其角、以似以續、續古之人、

周易 下經 漸卦

六四、鴻漸于木、或得其桷、无咎、

漢 焦贛 易林、坤之第二、屯

蒼龍單獨、

與石相觸、

摧折兩角、

室家不足、

漢 蘇伯玉妻 盤中詩

(古詩歸 四卷)

家居長安身在蜀、

何惜馬蹄歸不數、

羊肉千斤酒百斛、

令君馬肥麥臺粟、

今時人知四足、

與其書不能讀、

當從中央周四角、

以上の如き假字例及び押韻例よりして、角の古韻は(○ア)なりし事を明にし得た。古韻に於ては、屋、燭の兩韻ともに(○ア)韻であるが、然らばこの角字は何れを本籍韻としてゐたかといふに、上に

示せる押韻例によつて知りうる如く、燭韻の方であつた。

(B) 樸

二、倭名類聚鈔 卷第二十、草木部第三十二、木具第二百四十九。

樸 玉篇云樸 音璞字亦作朴 和名古波太 木皮也、

老子道德經 卷上、十五章、

儼兮若客、

渙兮若冰將釋、

敦兮其若樸、

曠兮其若谷、

渾兮其若濁、

右の如く、樸は古韻燭に屬する所のものにして(○_ク)韻であつた。而して樸字の發音は我が國に於ては今韻も古韻も同様であるが、樸字の反切匹角反を忠實に訓むならば今韻はハクの(ㄆ_ク)韻とせねばならないのである。一般は、現在に於て四聲の中最も多く古韻の原形を傳へてゐるものは入聲であると言はれてゐるが、樸字の如きはその一例である。併し、古今の學者が、樸の反切即ち匹角反が、ハクの外にボクの音に何故訓まれたかといふ事について疑問を抱かなかつたことについて、聊か不思議に思ふ次第である。即ち匹角反の切字角は前項に考察せる如く古韻は(○_ク)、故に之を古韻を以て訓めばボクとなり、隋唐以後の今韻を以て訓めばハクとなるのである。兎に角、支那の古韻をば我々は日常音として使用してゐるのであるから實に大したものといふはなければならない。

(C) 濁

二、法華經 方便品第二、

(國譯一切經法華部)

舍利弗、諸佛は五濁(ゴジュク)の惡世(あくぜ)に出でたまふ。所謂劫濁(こふせきじく)、煩惱濁(ぼんのうじく)、衆生濁(しよく)、見濁(せよく)、命濁(みやうじく)なり、是の如し。

三、大方廣佛華嚴經 卷第五十、如以出現品第三十六の一、(國譯一切經、涅槃部三)

其をして根力と覺分とを増長し、深信を生じて、濁心(じよくしん)を捨せしめ、不壞(ふえ)せざらしめ、智修をして、明かにして覺華を開敷せしめ、其を發心して本行を成就せしむ。

四、謠曲 卷上、 源太夫

後ヅレ謠「我はこれ、眞如實相の無漏を出で、有爲(うゐ)の濁塵(じよくじん)に光をまじへ、結縁の衆生擁護の神、橘姫とは我が事なり。

晋 張協 雜詩 (古詩源 卷七)

秋夜涼風起、	清風蕩暄濁、	蜻蛚吟階下、	飛蛾拂明濁、
君子從遠役、	佳人守楚獨、	離居幾何時、	鑽燧忽改木、
房櫳無行跡、	庭草萋以綠、	青苔依空牆、	蜘蛛網四屋、
感物多所懷、	沈憂結心曲、		

右の韻例によつて、濁の本籍韻は燭韻なること、及び、古韻にては屋、燭兩韻ともに（○ク）韻なりしことを明にしうるであらう。

第四、鐸韻（○ク）よりなれる覺韻……朔・朔

朔・朔

一五、伊呂波字類抄 卷第七、 古 ○鼻字、

告朔
コクノク

一六、本草和名 上卷、 第十一卷、草下六十七種、

朔。齋 楊玄操音上
朔下音濁 和名曾久止久

一七、倭名類聚鈔 卷第二十、草木部第三十二、草類第二百四十二、

朔齋 蘇敬本草注云朔齋 朔濁二音此間音
曾久止久 卽陸英也、

禮記 禮運第九、

以炮以燔、 以亨以炙、 以爲醴酪、 治其麻絲、 以爲布帛、

以養生送死、 以事鬼神上帝、 皆從其朔。

故元酒在室、 醴醕在戶、 粢醕在堂、 澄酒在下、

陳其犧牲、 備其鼎俎、 列其琴瑟、 管磬鐘鼓、

修其祝嘏。

詩經邶風 柏舟五章

我心匪鑒、

不可以茹、

亦有兄弟、

不可以據、

薄言往愬、

逢彼之怒、

鐸韻の古韻(ㄣ)より覺韻となれるものは恐らく、朔、萌字くらゐであらう。兎に角、若し他にありとするも僅か故、通常、新韻覺は、沃、屋、燭。の諸韻より組成されたものと言ふことが出来るのである。併し乍ら、右に示せるが如き、禮記、詩經の無尾韻として押める韻例より察するに、鐸韻よりも新韻たる覺韻を構成せる韻字の存することを新たに明にし得たのである。

現在に於て覺韻は殆ど凡てㄣ韻に變化してゐる故、覺韻に所屬せる諸韻の本籍韻は不明になつてゐたが、以上に試みた小論によつて、略々覺韻の源流を探究し得たと思ふ。